

2018年9月23日

福音書からのメッセージ

彼らは黙っていた。途中でだれがいちばん偉いかと議論し合っていたからである。

(マルコによる福音書9章34節)

弟子たちは「だれが一番偉いか」と議論していました。「議論する」という原語の本来の意味は、誰かに聞かれるとは思わなかった内緒話や私語のことだそうです。弟子たちはまさか、イエス様に聞かれるとは思っていなかったことでしょう。だからイエス様が「何を議論していたのか」と聞かれても、黙っていることしかできませんでした。

弟子たちの「だれが一番偉いか」という会話、このような会話は当時の社会では頻繁におこなわれていたようです。例えばユダヤ教のラビと呼ばれる教師たちは、新しい時代にはだれが最も偉大なのかということを真剣に議論していました。また食事の上座や下座に対するこだわりもありました。しかし彼らの裕福になったり人から尊敬を集めたりしたいと思っていたのは、それが神さまに祝福された証だと考えていたからです。つまり弟子たちが偉くなりたいという思いは、人からどう思われるかというよりも、神さまにとって自分はどうなのかという気持ちからきたのです。

イエス様は、そのような価値基準で議論をする弟子たちに、こう言われます。「仕える者となりなさい」。そして子どもの手を取り、抱き上げて言われます。「この子を受け入れる者はわたしを受け入れ、わたしを受け入れる者はわたしを遣わされた神さまを受け入れる」のだと。要は、子どもを受け入れなさいということです。それがイエス様を、そして神さまを受け入れることになるのです。これならできそうだと思うかもしれませんが。しかし今の子どもと当時の子ども、その言葉の持つ意味は全く



違います。当時のユダヤでは、子どもには人格が認められてい

ませんでした。価値がなく、取るに足りず、数にも数えられない存在でした。だからイエス様が「子どもを受け入れなさい」と言われた言葉をわたしたちは少し読み替える必要があると思います。わたしたちにとって、いわゆる「子ども」とはどんな人たちなのでしょう。わたしたちが数の内にも入れてない人はどんな人でしょうか。わたしたちの目にも留まらない、そんな人はいませんか。もし今、自分のそばにいたとしたら不快感を抱いてしまう、そのような人はいないでしょうか。

イエス様は、その見えなかった子どもの存在を受け入れるように命じられます。偉くなることが神さまに喜ばれることではありません。小さな一人を受け入れ、仕える者となることが、神さまを受け入れることになるのです。今までの価値観を覆したのです。

そしてイエス様は、小さな者を受け入れる見本を見せてくださいました。社会の片隅にいる人たちの手を取り、人々に蔑まれた人と食事をされました。そして神さまから遠く離れた、わたしたち一人一人をも受け入れてくださったのです。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>